

石川は続けた。

弁護団長は、ヴァイツゼッカーの講演録「荒野の四〇年」から、「がれきの女」の一節を引用してよく話していました。爆撃によって破壊されたがれきを拾い集めて、もう一度教会を築こうとした一群の女性たちの話です。

「そんなもの集めて何になる」とほとんどの人々は嘲り笑いました。それでも彼女たちはがれきを集め続けました。当時、ドイツ国民の内面すべてが崩れようとするのを支え、自分を取り戻したのは、まさに彼女たちのような人々のおかげだったと称え、「人間性の光が消えないように守り続けた存在」として話したのです。

刹那、渚にはその話が、南米に伝わる「ハチドリのひとしずく」と重なった。そして、同じその精神で地道な活動をしている仲間の存在と結びついた。

私だけじゃない。物語のお話でもなく、実際にそうやって時代を前に進めてきた人たちがいた。高名でも有名でもない。その名が語り継がれることがなくても、それがたとえささやかでも、自分にできることを懸命にやってきた人たちがいたんだ。

渚は感動に震えた。

一九九九年、二年ぶりの公害調停が開かれたときには、二十一世紀を循環型社会とする目標が掲げられました。

最善と考えられる先進的な技術システムを活用し、「後世にツケを回さない」という考え方を基本に、副生成物を再利用すること。すべての関係者が参加協力して、新たな価値観を創造し、問題を解決すべきことなどが調停委員長から説明され、住民側と香川県は同意しました。

翌、二〇〇〇年六月六日。

島で行われた公害調停調印式の壇上、知事は住民の前で涙ながらに謝罪をしました。「県が廃棄物の認定を誤り、指導監督を怠った結果、豊島住民に対して長期にわたり不安と苦痛を与えたことを認め……」

知事の言葉に、会場に集まった六〇〇人を超える住民たちも泣きました。苦悩し、自問し続けた知事の話にまた涙し、豊島住民はそれを満場の拍手で受け入れたのです。

調停委員長からは、住民に対して「不撓不屈の取り組みに心から敬意を表する」と

したうえで、「これからは、お互いに敵対関係ではなく、廃棄物を共通の敵として、互いに協力して事業を進め、第二の豊島の悲劇を起こさないためのモニュメントとしてほしい」と語られました。

正直、公害調停を申請したとき、実際に廃棄物の撤去が実現すると考えた人は誰もいなかったと思います。それでもやってこられたのは、「せめて一矢報いたい」という悔しさや、「死んでも死にきれん」という思いがあったからだと思います。そして、できるはずがないと誰もが思ったことに対して、我を捨てて必死になっている姿に、多くの人が共感し、声援を送ってくれました。そのことが、不可能を可能に変えていきました。

「壮絶」としか言いようのない石川の話。他にもそのような歴史はあるのだろう。しかしこれもまた確かに、「壮絶」な歴史の一つであることに間違いない。それを眠らせておいていいわけがない。歴史は繰り返される。が、歴史から学ぶのもまた人類ではないか。眠らせることなく、常に継承し、発信し続けることができれば——

ましてやSDGsが声高に叫ばれる現代において、この取り組みは紛れもないモニュメントであり、シンボルとなる。

二〇〇三年の技術委員会で、当時の委員長がこんなふうに語っています。「循環型社会は、サステナブル・ソサイアティというのが一番適切ではないか」と。

さらに遡ること八年前、一九九五年に開かれた第一回豊島シンポジウムのタイトルは、「循環型社会をめざして」でした。

サステナブル——

その単語に渚はハッとする。

サステナブル・ディベロップメント・ゴールズ、SDGsだ。

私たちは決して、リサイクルを目標に循環型社会をつくっているではありません。リサイクルはあくまでも一つの手段であって、大量生産・大量消費・大量リサイクルという考えに追従するつもりはありません。

供給量や使用量を少なくしていくと同時に、有害物質やその可能性のあるものは原

則的に使用しない。どうしても使用しなければならない場合には、循環体系の中で使いこなしていく。出口で何とかしようという対策ではなく、後世代の人々や他地域にツケ回しをしない、負の遺産を残さないことを原則としています。

九一万トンに及ぶ廃棄物及び汚染土壌中の有害物を分解し、または金属として回収し、すべてを再利用するというのは、世界に類を見ない取り組みでした。しかしそれは、一般の人が見ても、これなら使えるというような資源に変えなければならない、という思いがあったからでした。

たまらず渚が質問した。

「それって、国連が提唱しているSDGsの考え方と同じだと思うんですが」

そのひと言に、石川が小さく笑った。

「それを私たちは三〇年も前から、ずっと探り続けてきたんです」

渚は自分の認識に誤りがなかったことを確信した。

「これは——」

資料館の一室。壁一面に貼られた模造紙に、無数の名前が並ぶ。

「これは、調停申請をした人の名前です」

「これ全部がですか？」

「はい、五四九人、全部です」

言葉を失った。目にして感じる、その数の多さに。

「これ、うちのおじいちゃん」

その声の指す方に目をやる。

「美海ちゃんの？」

一瞬目が合った美海は、ふっと軽く微笑んでうつむいたあと、「澤村雄一」という名前を見あげて言った。

「おじいちゃんもこの島を守るために闘った……」

まじまじと見つめる、美海の祖父という名前の前に黒いリボンを見つけ、渚は沈思し、ハッとする。

「このリボンで——」

渚が気づいたことを理解し、石川が告げる。

「亡くなった方です」

模造紙の至る所に貼られた黒いリボンに背筋がゾワッと沫だつ。

半数、いやもっと、六割、七割――

産業廃棄物のせいで亡くなったとは考えにくい。とすれば、高齢によるもの。尋ねると石川は、そうです、と頷く。

「まるで墓標――」

茫然と見上げたまま、渚は息を呑む。

「一九九三年に調停を起こした五四九世帯主のほとんどが、すでに他界しています。生きてその目でこの事件の顛末を見ることができる人はごく一握りでしょう。多くの人が、自分の代ですべてが終わることはないと分かってました。それでもやってこられたのは、子や孫に、この島の豊かな自然を残したいという思いからです」

つまり、当時すでに高齢だった申請人は、子や孫、それに続く子々孫々のために闘っていたということだ。一度破壊された自然を元通りに回復することが如何に困難なことか。

「これは、命を賭けた闘い」そう思い、模造紙に再び目をやったとほぼ同時に石川は言った。

「これは、終わりのない始まりだったんです」

やっぱり語り継がれるべきだ、と渚は胸の中で呟いた。

＊

植村の民宿は、港から少し上がった場所にあった。いかにも古民家といった風情の民宿から見下ろすと、そこには海に浮かぶいくつもの大型船が見えた。

「おもちゃみたい」

そう言う渚に向けて植村が笑った。

「あれでも割と大きなタンカーなんやで、見とるといろんなんがあって面白いわ」

にこやかに言う植村から目線を移し、船を眺めている渚に植村が声をかけた。

「疲れとるやろから、荷物置いてお風呂入ってこんせ。もう沸いとるから」

間を置いて返事をし、植村の案内を受けた。

古民家の割に綺麗に掃除がされている。無駄な物も一切ない。民宿客に対応慣れしているのが覗える。少し広めのバスタブに浸かり、研修で聞いた一つ一つを思い出す。

想像以上だ――